

「恵みと慈しみがわたしを追う」

2021年1月17日（日） 仙台教会主日礼拝説教 詩編 23 編 585

小林孝男

1. 「みぎわ」の発行

何十年も前の話ですが、初めてクラス担任をして、18名の中学1年生のクラスを受け持った際に困ったことがありました。それは聖書科の教員だったもので、週1回しか自分のクラスでの授業がないことです。国・数・英のような教科であれば、毎日のように自分が担任をしているクラスの授業があり、授業を通してクラスの生徒たちと深く関わり合いを持つことができるのですが、それができないということは、担任としては大きなハンディでした。それを少しでもカバーしようと思い、クラス通信を毎日発行することにしました。ガリ版刷りの通信に付けた名前は「みぎわ」です。このクラスが、18名の生徒たちにとって、憩いの場となるように、安らぎの場となるように、元気を取り戻す場となるようにという祈りを込めて、口語訳聖書の詩篇 23 篇から採りました（新共同訳では「みぎわ」という言葉がなくなり、「水のほとり」となってしまう少しガッカリしましたが、最新の聖書協会共同訳では「汀（みぎわ）」が復活しています）。

2. 生徒の感性の豊かさ

さて、中学1年の聖書の授業では、詩編 23 編の暗唱を夏休みの宿題としていました。生徒たちは若いので、集中さえすれば30分程度で完璧に暗唱することができます。ですから生徒にとって、この宿題はそう負担ではありません。前期末試験の際には、詩編 23 編を暗唱していることを前提に問題を出すのですが、その一つとして「詩編 23 編を読んで思うこと」という題で、答案用紙の裏に自由に作文を書いてもらいました。毎年その作文を読むのが楽しみでした。読むたびに、若者の感性の豊かさや、心の柔軟さに触れることができるからです。

ある生徒はこんなことを書いています。

「『災いを恐れない』とか『私を力づける』とか、前向きなことが並べられているなと思った。でも『私には何も欠けることがない』と言っているが、本当にそうなのか疑問だ。人はいずれ死んでしまうのに『欠けることがない』というのは違うのではないだろうか」。

つまりこういうことなのでしょう。どんなに豊かなもので満ち溢れた人生であっても、またその人生を積極的に生きていても、人生の最後は死だ。そして死は、すべてのものを無にしないか、全てを欠けたものにしてしまうのではないか。であるならば、「欠けることがない」などとは言えないのではないか、という鋭い指摘なのです。死んでしまえばすべてが無に帰すという、子どもなりの素朴な生死観ですが、これをさらに突き詰めていけば、「いずれはすべてが無に帰すのだから、一生懸命生きることは空しいではないか」ということになってしまいます。そんな思いを無意識のうちに持っているかもしれない子どもたちに、死とは何か、生きるとは何かを、しっかり伝えていく教育は、私学だからこそ、そしてキリスト教学校だからこそできるのであり、キリスト教学校の大切な使命の一つでもあるのです。

私たちクリスチャンにとって、死はすべてを無に帰してしまう絶対的な力ではありません。また、肉体の死の先にあるものは、絶望でも虚無でも混沌でもありません。肉体の死の先にあるものは、それは希望です。神の命の中に招き入れられ、永遠の安らぎの中に置かれることへの希望です。そのことを確信しながら、この世で生きることを赦されている私たちは、なんと幸いなことなのでしょう。神のみ心によってこの世で生かされている間は、生かされていることに感謝しながら、また与えられている役割を十分に果たせるよう祈りながら歩み続ければよいのです。喜怒哀楽の渦巻くこの世ですが、私たちには何ものをもってしても打ち砕かれることのない確かな希望があります。その希望を胸に、安心して歩み続ければいいのです。こういったことに若いうちに

気付くことができれば、どれほど幸いでしょう。旧約のコヘレトの言葉に、「**青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。**」（12：1）とありますがその通りです。

町歩きであるお寺に行ったとき、境内の掲示板にこんな言葉が書いてありました。「人生一生酒一升、あるかと思えばもう空か」。うまいことを言うものです。まだあるまだあると思っていると、いつの間にか無くなってしまっていることにふと気づく、ということが往々にしてあります。中学生や高校生には、まだまだ時間があるのだからと安心してしまわずのではなく、人生の早いうちに、生きるとは何か、死とは何かという人生の一大事について、しっかりと、また確信をもって伝えていく必要があります。教会や教会学校やキリスト教学校には、そのような使命があるのです。

作文の話に戻りますが、別のある生徒はこんなことを書いていました。

「私たちが神様の役で羊飼いになったら、面倒を見られるのはせいぜい 200～300 匹の羊、それによく訓練された犬も 2 匹は必要だ。それなのに神様は一人で何億人もの人をサタンから守り、正しい道に導いてくれる。メチャクチャすごい。」

子どもなりに冷静に分析して結論を出していますが、全くその通りです。私たちが信じている神は、メチャクチャすごいお方です。一人の人生だけではなく、全世界 77 億一人ひとりの人生に責任をもって関わり、守り、導き、愛のご配慮の中で具体的な出来事を通し、最も良きことを行ってくれる神です。この生徒が見抜いているように、神はメチャクチャすごいお方なのです。

また、ある生徒はこんな風に書いていました。

「私は、詩編 23 編を読んで、主の存在について改めて実感しました。今まで『主は私たちの上にいる者』と考えていました。ですが、この詩編 23 編を読んで、主は上にいるのではなく、『主は私たちと共にいて下さる方』なのだと思います。もし、私が死の陰の谷に行くことになったとしても、主が私と共にいて下さると思えば、恐れずに前に進んでいきたいです。今まで私は、死んだらどこに行くのかとずっと疑問に思っていました。このことについても、詩編 23 編を読み理解することができました。死んで、主の家に帰ることができるというのは、とても幸せなことだと思います。また、今生きている人たちが帰れる主の家というのは、とても大きなものなのだと思います。」

今回、詩編 23 編を読んだことは、私にとっても影響を与えたと思います。これからも多くの聖句と出会っていきたいです。」

「主は私たちの上にいる者」ではなく、「主は私たちと共にいて下さる方なのだ」と感じ取る力、すごいです！それは正に私たちが信じていることそのものです。

「死んで、主の家に帰ることができるというのは、とても幸せなことだと思います。」と生徒は書いていますが、フィリピの手紙の中でパウロが書いている「**わたしたちの本国は天にあります。**」（3：20）という希望に溢れた言葉を思い起こさせます。

「主の家というのはとても大きなものなのだと思います」という生徒の感想は、ヨハネ福音書のイエスの言葉、「**わたしの父の家には住むところがたくさんある**」（14：2）を思い起こさせます。聖書を読み始めて半年足らずの中学 1 年生、何と感性が豊かで、直観力が鋭いのでしょうか。

3. 恵みと慈しみがわたしを追う

私たちが詩編 23 編を読むたびに、その内容に「アーメン」「その通りです」と唱える素直な信仰を持ちたいものです。

詩編 23 編は仙台教会の礼拝で、これまで何度も読まれてきているはずですし、皆さん個人としても、何度も繰り返して読んできた個所でしょう。私たちはこの詩編によって励まされ、慰め

られ、希望を与えられています。何故ならこの詩編を読むたびに、イエス・キリストと出会い、イエスのみ声を聞くことができるからです。

この詩編は「**主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない**」という言葉で始まります。この箇所を読むとき、イエスの次のような声が聞こえてこないでしょうか。「**わたしは良い羊飼ひである。良い羊飼ひは羊のために命を捨てる**」（ヨハネ 10：11）。こう語られたイエスは、実際私たちが罪から救うために、十字架で命を捨ててくださいました。その贖いの死によって、私たちは今、永遠の命に生きることが許されているのです。

2～3 節「**主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる**」。この箇所を読むとき、イエスがこんな風に私たちを招く声が聞こえてきます。「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。**」（マタイ 11：28～29）。私たちはこのイエスの招きの声に、どれほど慰められてきたことでしょうか。今日も様々なことで心を煩わせ、悩み、心が疲れ果ててしまっておられる方がおいでかもしれません。どうかその方は詩編 23 編を通し、イエスがあなたに向かって語っておられる「**私のもとに来なさい。私のもとで、安心して心を休ませなさい。**」という招きの声を聞きとってください。

3 節後半「**主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる**」。イエスのみが、父なる神のみもとへ至る「正しい道」です。だからこそイエスは、「**わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。**」（ヨハネ 14：6）と語られるのです。一人ひとりの人生の道は、その人にとっては初めて歩く道です。果たしてこの道でいいのだろうか、この道は安全なのだろうか、この道は目的地につながっているのだろうかと不安になるのは当然です。しかし、大丈夫です。正しい道そのものであるイエス様が、「**私の上を歩きなさい**」と、私たちの人生の道案内、いや道そのものとなってくださっているからです。

4 節「**死の影の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける**」。イエスはインマヌエルの主として、私たちのもとにおいでくださいました。すなわちイエス・キリストにおいて、「**神我らと共におられる**」（マタイ 1：23）という事柄が現実となったのです。インマヌエルの主としてお生まれになったイエスは、私たちの罪を負い十字架で死に、墓に葬られます。そして、死の力を打ち破り死から復活されたイエスは、「**わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる**」（マタイ 28：20）と約束してくださいました。死の力をも滅ぼしたお方が、私たちと共に生き、共に歩み、私たちを支え、守り、導いてくださっています。だから、人生の旅路において、私たちを恐れさすものはもはや何もないのです。

5 節「**わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる**」。「わたしを苦しめる者」は、必ずしも人とは限りません。私たちは人生の中で、予想もしていない様々な出来事によって、大きな苦しみを経験したり、悲しみの淵に投げ落とされたりします。しかし、どんなに厳しい状況の中に置かれたとしても、主はそこに「**命のパン**」（ヨハネ 6：35）としておいでになり、弱り果てている私たちに、新たな力を与えてくださいます。命のパンは私たちを元気にしてくれるのです。

最後の 6 節「**命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう**」。今回改めて詩編 23 編を読み、6 節の中に主のみ旨を強く示されました。私たちを滅ぼすために、敵が追いかけてくるのではありません。私たちを絶望させるために、苦しみや悲しみや死が、追いかけてくるのでもありません。私たちを追いかけてくるもの、それは神の恵みと慈しみです。たとえ私たちがどこへ逃げ出したとしても、神の恵みと慈し

みは、私たちを見失うことなく、追いかけてきます。なぜなら、神の恵みと慈しみそのものであられるお方、イエス・キリストが私たちの人生の同伴者だからです。

私たちがどこにしようと、どんな状況に置かれようとも、今週も恵みと慈しみが私たちを追いかけてきます。だから大丈夫なのです。今日からの7日の旅路を、平安のうちに感謝をもって歩ませていただきますよう。

(祈祷)

神様、礼拝のひとつきを感謝します。「恵みと慈しみはいつもわたしを追う」とのみ言葉をいただきました。有り難うございます。今週も私たちの周りでいろいろの出来事が起き、心を悩ませることがあるかもしれません。しかし、あなたの恵みと慈しみは、どこまでも追ってきてくださり、私たちを見失うことはありません。そのことを信じながら、そしてそのことに支えられながら、平安のうちに7日の旅路を歩ませてください。そしてまた、あなたの恵みと慈しみにお応えし、私たちもまた、隣人に対して良き業を行う者として、歩ませてくださいますようお願いいたします。

病床にある方々を覚えます。癒しのみ手を置いてください。病の痛みや不安を取り去ってください。どうか主にある平安が与えられますように。

あなたの愛と正義と平和のみ心が、地上にあまねく行われる一週間となりますように。イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン